

# 我が国の高齢者への「老年的超越」概念の適用に関する問題点

末田 啓二\*

## Some Problems Related to an Application of Gerotranscendence to the Old in Japan

Keiji SUEDA\*

### Abstract

Tornstam (1989) proposed a concept about gerotranscendence which appears in latter period of senescence. In this paper, the concept was considered that it can apply or not to the old in Japan, where maternal principle is dominant, and ego (self) and sense of animism are different from those in Europe and America.

The result is as follows; (1) Maternal principle promote sense of animism and restrain ego function. (2) It seems that Gerotranscendence appear in latter period of senescence when ego function decline. (3) Gerotranscendence appear before declination of ego function among the old in Japan. (4) and therefore gerotranscendence appears in latter period of senescence in Europe and America, but appears in earlier period in Japan.

### 要 旨

Tornstam (1989) は老年的超越が老年期後半に出現する心理的特性であることを指摘している。

本稿ではこの心理的特性が、母性社会と言われる我が国においてもそのまま当てはまるかどうかについて、自我やアニミズム・アニミズム心性との関係で論じた。その結果、文化的、歴史的に母性社会においては、アニミズムやアニミズム心性の傾向が強く、自我意識が抑制されることから、老年的超越は老年期後半よりもずっと以前の、発達のかなり早期から継続して認められる心理的特性であることが推測された。

Key Words : gerotranscendence, sense of animism, maternal principle, well-being, ego

キーワード：老年的超越，アニミズム心性，母性原理，主観的幸福感，自我

### はじめに

著者らは高齢者のwell-being（ここでは主観的幸福感と訳しておく）に関わる諸要因を検討してきたが、その中で世代間交流による高齢者の社会的役割である文化の伝承行為が、well-beingの維持・向上に有効であることが認められた（末田ら，2008）<sup>1)</sup>。またポジティブ心理学（Seligman, 1998）<sup>2)</sup>を援用した施設高齢者へのポジティブ的介入による効果も認められた（末

田ら，2015）<sup>3)</sup>。このように老年期は個人的にも社会的にも多くの喪失体験や諸機能の低下を繰り返しているにもかかわらず、いろいろな形で精神的安定やwell-beingを維持していることが明らかになってきた。また楽観性やポジティブ志向の増大（橋本・子安，2011）<sup>4)</sup>；2012）<sup>5)</sup>）、Kennedy et al. (2004）<sup>6)</sup>の指摘するpositive effect, positive bias（例えば物事を良いように解釈するとか、都合の良いことだけに注目する）といった心理的機制を用いてwell-beingの維持を図って

\*本学特任教授

論文（原著）：2019年1月25日受付 2019年1月28日受理

いることが認められている。さらにTornstam (1989)<sup>7)</sup>は老年期後半の心理的特性として、以下に述べる老年的超越 (gerotranscendence) という概念を提唱している。このように高齢者は多くの心理的機制に守られて、well-beingに留まらず、主観的健康度や自尊感情においても、青年と同等のレベルを維持していることが明らかになった (末田, 2000)<sup>8)</sup>。

本稿では特に上述した老年的超越の概念をめぐって、わが国の文化的背景を考慮に入れながら、筆者らによるこれまでのアニミズム心性に関する研究と関連づけて論じていく。その理由としてアニミズム心性が老年的超越の特定の次元と極めて類似しているためであり、加えて他の次元に関しても後述するように、それぞれの次元が自我意識の変化と密接に関係しているためである。

## 1 老年的超越の概念とアニミズムとの関係性

老年的超越はTornstam (1989)<sup>7)</sup>によると、老年期後半に生じる心理的特性である。老年的超越は表1に示すように3つの次元から構成され、それぞれ「社会との関係の変化」、「自己意識の変化」、「宇宙的意識の獲得」の次元である<sup>22)</sup>。各次元にはいくつかの特徴がみられ、宇宙的意識の獲得の次元では、時間や空間についての認識の変化や、生と死についての認識の変化、さらには自然や宇宙に対する認識の変化などに表れているように、意識や認識に自他の区別や断絶、不連続がなくなり、両者は別々ではなく連続的で一体化して感じられることが特徴である。いわゆる自己との一体感あるいは融合が強まるのが特徴である。いずれの特徴にもそれぞれwell-beingの維持・向上に作用する感覚の変化と考えられる。そしてこの感覚は以下に述べるアニミズム心性とよく似た特徴をもっていると思われる。

表1 Tornstamの老年的超越概念 (増井他, 2010)<sup>22)</sup>

| 次元        | 超越の特徴            | 説明  |
|-----------|------------------|---|
| 社会との関係の変化 | 人間関係の意義と重要性の変化   | 友人の数や交友範囲の広さといった表面的な部分は重視せず、少数の人と深い関係を結ぶことを重視するようになる。     |
|           | 社会的役割についての認識の変化  | 社会的役割と自己の違いを再認識し、社会的な役割や地位を重視しなくなる。                       |
|           | 無垢さの解放           | 内なる子どもを意識することや無垢であることが成熟にとって重要であることを認識する。                 |
|           | 物質的豊かさについての認識の変化 | 物質的な富や豊かさは自らの幸福には重要でないことを認識する。                            |
|           | 経験に基づいた知恵の獲得     | なにが善でなにが悪であるかを決めるのは困難であることを認識する。                          |
| 自己意識の変化   | 自己認識の変化          | 自己のなかにこれまで知らなかった、隠された部分を発見する。                             |
|           | 自己中心性の減少         | 自分が世界の中心にあるという考え方をしなくなる。                                  |
|           | 自己の身体へのこだわりの減少   | 身体機能や容姿の低下をそのまま受容できるようになる。                                |
|           | 自己に対するこだわりの減少    | 自己中心的な考え方から利他主義的な考え方に变化する。                                |
|           | 自己統合の発達          | 人生の良かったことも悪かったことも、すべて自分の人生を完成させるために必要であったことを認識する。         |
| 宇宙的意識の獲得  | 時間や空間についての認識の変化  | 現在と過去、そして未来の区別や、「ここ」と「あそこ」といった空間の区別がなくなり、一体化して感じられるようになる。 |
|           | 前の世代とのつながりの認識の変化 | 先祖や昔の時代の人々のつながりをより強く感じるようになる。                             |
|           | 生と死の認識の変化        | 死は1つの通過点であり、生と死を区別する本質的なものはないと認識する。                       |
|           | 神秘性に対する感受性の向上    | 何気ない身近な自然や生活の中に、生命の神秘や宇宙の意思を感じるようになる。                     |
|           | 一体感の獲得           | 人類全体や宇宙(大いなるもの)との一体感を感じるようになる。                            |

### ①アニミズムとアニミズム心性

ところでアニミズムは文化人類学や宗教学、民俗学などで多く語られてきているが、本稿で論ずるアニミズムとはピアジェの思考発達理論 (Piage, 1929)<sup>9)</sup> から見出された幼児期の思考形態である。すなわち幼児期の自己中心的思考から生じる幼児期特有の世界観であるアニミズム (汎心論) は、すべての事物は自分と同じように心を持ち、生きていて話をしたり食事をしたりしていると捉えている。この捉え方 (アニミズム) は7歳頃以降、脱中心化に向かうに従い減少・消滅すると考えられている。ピアジェの認知発達理論はその後多くの検証と批判が繰り返されているが (Loof & Bartz, 1969<sup>10)</sup>; Carey, 1985<sup>11)</sup>; Lourenco & Machado, 1996<sup>12)</sup>; 永盛, 2009<sup>13)</sup>)、アニミズムが発達初期の直感的思考 (自己中心的思考) に伴って形成されるとの考えは変わらない。したがってその後続く、具体的操作期や形式的操作期へと発達が進むにつれ、アニミズムが消失していくことは容易に理解できる。しかしながら大元 (1988)<sup>14)</sup> や池内 (2010)<sup>15)</sup> のように、アニミズムそのもの (例えば石も自分と同じように生きている、おしゃべりしていると思っている) ではなく、感覚・情緒次元での反応、すなわち石も自分と同じように生きている、おしゃべりしていると感じられる、気がする、という反応は、幼児に限らず成人にも通常認められる感覚である。この感覚・情緒次元の反応を、著者らはアニミズム心性と呼んできた。

末田ら (2015)<sup>16)</sup> や藤田ら (2013)<sup>17)</sup> はアニミズム心性尺度を作成し (表2)、児童・青年・高齢者に実施したが (児童用は文章表現を平易にした質問項目で構成)、いずれの群も共通して2つの因子 (人格化因子、ペット因子) が抽出された。また尺度得点や因子得点はいずれの群も女性が男性より高く、また青年に低く児童・高齢者に高い傾向がみられた。さらに共感性得点との相関もすべて高かった。これらの結果からアニミズム心性はどの発達段階にも認められ、しかも各年齢共通の概念であることが明らかになった。

### ②宇宙的意識の獲得の次元とアニミズム心性との関連性

老年的超越における宇宙的意識の獲得の次元での各特徴は、共通して意識・認識の変化であるが、個々の高齢者にとっては感覚次元の変化と考えられる。つまり一体化して感じられるようになる、宇宙の意思を感じるようになる、などである。これらの感覚は上述したアニミズムの感覚・情緒次元の反応であるアニミズ

ム心性と極めて類似した感覚と言える。例えば「何気ない身近な自然や生活の中に、生命の神秘や宇宙の意思を感じる」感覚は、幼児期のアニミズムのように自他の未分化からくる感覚や思考とは異なり、児童期以降いったん分化した感覚や情緒が再び統合された時点で生じる感覚や情緒と理解できる。これに対してアニミズム心性は児童期以降の分化した感覚や情緒と併存する、自他の統合された感覚と理解できる。すなわち自然の事物や現象は自分とは全く別の存在ではあるが (分化した感覚)、時として一体に感じることもあるという感覚 (統合された感覚) がアニミズム心性ということになる。そのため老年的超越は老年期後半に現れ、アニミズム心性は幼児期以降も継続して存在していることになる。

以上のように老年的超越における宇宙的意識の獲得の次元は、アニミズム心性と類似した感覚であると言えるが、発現機序は大きく異なっていることがわかる。したがって老年的超越は高齢者が幼児の思考の発達レベルに戻ったために生じたのではなく、これまで何らかの理由で抑制が働き、アニミズム心性が顕在化したと考えるのが妥当であろう。アニミズム心性が抑制される理由や背景として、理性や知性という名の下に、客観性、科学性、論理性・合理性などが重視される生活環境が考えられる。老年期 (65才以降) に至ってはこれらの抑制から解放され、意識・認識レベルにおいても、感覚や情緒レベルにおいても自由な自己表出が許されることから、潜在化していたアニミズム心性が顕在化したと解釈できよう。

表2 アニミズム心性尺度項目例 (全60項目)

4件法: よくある～まったくない。あなたはどれくらい感じたことがありますか。

- |   |                                    |
|---|------------------------------------|
| 1 | ボツンとはなれて立っているがいとう (街灯) は、いかにもさみしそう |
| 2 | 道ばたに咲いている花は、私に何か話しかけてくれているようだ      |
| 3 | カラカラの田んぼではカエルの声は苦しうに聞こえる           |
| 4 | しとしと静かにふる雨をながめていると、お空がなっているようだ     |
| 5 | きずつけられた机 (つくえ) を見ると、とてもいたそう        |
| 6 | タンポポの種 (タネ) が風に吹かれていると、とても楽しそう     |
| 7 | ペットは家族のひとりである                      |
| 8 | はげしいカミナリはまるで天が怒 (いか) りくるっているようだ    |

## 2 老年的超越と自我との関係

老年的超越の2つの次元、すなわち「社会との関係の変化」の次元や、「自己意識の変化」の次元の特徴は、いずれもいわゆる自我に関わる特徴である。本稿で取り上げる自我とは、精神分析理論の中で論じられてきた自我ではなく、「自己に対する意識・認識であり、行動や意識の主体である。他人や周囲の事物と区別され、主体性、単一性、同一性、独自性、連続性、統合性の感覚を備えている」(心理学辞典, ミネルヴァ書房, 1971 193頁; 著者により一部改変)と定義されるように、意識や行動の主体であり、自律的で欲求充足的な行動へと駆り立てる働きを有している。老年期は社会的関係の狭小化や社会的役割の減少、さらに競争事態の減少などが自我意識を低下させていることが示唆される。マズロー(1973)<sup>18)</sup>が「自己実現欲求」を欲求の最高段階に位置づけているのも、自己実現が自我発達の究極の段階、自我が十全に機能した状態と考えたからであろう。またErikson & Erikson (1997)<sup>19)</sup>は心理・社会的発達段階説の中で、最高段階として第8段階(統合vs絶望)を位置付けている。この段階は自我の統合とでも呼べるように、自我意識の最終段階としての意味を持っている。しかしながら第8段階以後の課題として、身体機能や社会関係の減少に伴う危機的状態を乗り越えるための新たな心理的適応様式が必要であることを指摘し、第9段階として老年的超越に近い特性について触れている。このように老年的超越は自我意識の変化と密接にかかわり、この意識の変化が老年期後半に認められると主張するTornstamの考えに立てば、自我意識の低下が引き金になって老年的超越という心理的特性が生じたと理解できる。

このように自我の形成、自我発達を重視するこれまでの人間観、発達観に立てば、老年期後半(85歳以降)、すなわち自我意識が低下する時期に老年的超越が出現するとの考え方は理解できるだろう。しかし河合(1976)<sup>20)</sup>が指摘するように、我が国の自我のあり方は必ずしも欧米のそれとは同じではなく、自我の働きが欧米ほど重視されないといわれる我が国のような社会にあっては、自我確立がそのまま人間としての完成・成熟を意味するとは限らないのである。河合が母性原理として「包含する・一体化する」機能を挙げ、父性原理として「切断する・分離する」機能を指摘していることから理解できるように、欧米の自我発達重視は父性原理に基づくものであって、老年期後半には自我意識の低下に伴い、父性原理が働かなくなり、代

わって母性原理が顕在化するために老年的超越という心理的特性が生じたと言えるだろう。この考えに立てば、いわゆる母性社会と言われる我が国では、老年的超越はアニミズム心性と同様に必ずしも老年期後半に出現する必要はなく、より以前の発達段階から出現してもよいのではないかと考えが生じる。換言すれば、父性原理は自我と直接関係し、父性原理の下で自我意識が強化されていく。一方、母性原理は父性原理である分離や分断、区別とは逆方向のベクトルで、合体、融合、調和、均質化の方向に向かう。したがって母性原理の働きやすい社会にあっては、自我意識が低下する以前から、老年的超越の感覚は継続しているのではないだろうか。

## 3 老年的超越がなぜ老年期後半に出現するのか

前節では老年的超越が自我意識の低下によってもたらされるのではないかと指摘したが、その理由や根拠は何であろうか。高齢者は個人差も大きいですが、一般的には老年期後半は身体機能や運動機能が著しく低下し、活動範囲は大幅に制限される。それに起因して対人関係が限定され、社会的役割や社会的責任も減少する。また視覚や聴覚など、知覚機能や認知機能、特に記憶能力の減退に伴い、対人的コミュニケーションが低調になり、内省化が進み回想を中心として、関心はもっぱら自己に向かうと言われている。このような高齢者の諸機能の低下や減少は高齢者個人にとっては生活上のハンディとなり、心理的適応やwell-beingにとっては大きな危機となっている。この危機の解決に高齢者は諸機能が十全に機能していた時代に獲得していた価値観、例えば社会的地位や役割の重要性、富や物質的豊かさなどを否定することによって、機能の低下による損失を最小限に抑え、well-beingの維持を図ろうとする否定という心理機制を働かせているのではないだろうか。前述した楽天主義やpositive biasなどの心理機制と共に、well-beingの維持に役立つと考えられる。

2つ目の根拠はポジティブ心理学の視点から説明できる。

Seligman (1998) に始まるポジティブ心理学では、well-beingを図1のように階層構造としてとらえている(尾崎, 2010)<sup>21)</sup>。

図1が示すように、well-beingは自己実現の上に自己超越があり、spiritual well-beingとしてwell-beingの最高位に位置している。これは自我発達から見る

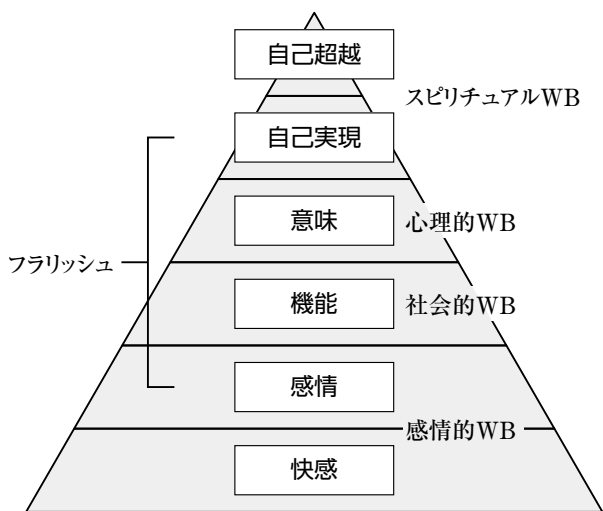


図1 well-beingの階層(尾崎, 2010)

と自己実現が究極の完成した姿ではあるが(Maslow, 1973)<sup>18)</sup>、well-beingの視点からはさらに上の段階が存在していることを示している。このことは自我発達に価値を置く社会にあっては、人間性や人間としての完成された姿として自我確立を意味づけているが、well-beingの観点からは、自我確立が人間性や人間(あるいは人格)として完成された姿だろうかとの疑問を投げかけていることを意味している。しかも自己超越が自己実現の上に位置されていることは、見方によっては究極のwell-beingは自我あるいは自我意識の低下によってもたらされることを示唆しているのではないか、つまりwell-beingの最終段階は自我から自由になった状態(超越した状態)を示していると解釈できる。

以上のように老年期後半では、心身諸機能の低下による損失を軽減するために、過去の価値観を否定したり、自我意識が低下することによって、老年的超越が出現すると考えられる。

#### 4 老年的超越とアニミズム心性、自我の3者関係の仮説モデル

これまで述べてきた老年的超越とアニミズム心性、自我のそれぞれの関係に基づいて仮説モデルを図2に示した。中央の父性、母性は文化的背景であり、背景の違いによって老年的超越やアニミズム心性などへの影響が促進効果(+)か抑制効果(-)かを示している。また老年的超越とアニミズム心性、自我のそれぞれ3者間の相関を同じく+、-で表示している。

母性社会と言われる我が国は古来より山岳信仰に代表されるように、自然が信仰の対象になってきた。こ

の信仰は宇宙に存在するすべての事物には霊が宿り、常に万物と自己との一体感に基づいている。この感覚が八百万の神々への信仰と結びつき、文化人類学や宗教学でいうアニミズムと呼ばれるものである。そのため生物学的な生命の有無や、過去・現在といった時間的前後関係などとは関係なく(超越して)、常に自然や万物との一体感が支配している。このようなアニミズムは当然ながらアニミズム心性に反映する。アニミズムの特徴が強いとアニミズム心性も当然強いと考えられる。したがって分離や競争事態を拒む母性原理が働く社会では、一体感・合体、共感性や調和、同質性が強く追求され、個としてよりも集団や場としての存在が強調されることから、自我は必然的に抑えられ自我意識が低下する。その一方で、アニミズムやアニミズム心性はより強化されるのではないだろうか。老年的超越に関しても母性原理によって同じ理由で強化されるだろう。

一方、父性社会においては母性原理とは対照的に、父性原理が作用すると自我が強化され、逆にアニミズム心性や老年的超越は抑制されるだろう。但し図2は老年期前半までの仮説であり、老年期後半になると、恐らく父性原理の影響は相対的に小さくなり、自我意識の低下に伴って、代わってアニミズム心性や老年的超越が促進されるのではないだろうか。もちろん母性社会においては、母性原理の影響は継続され、アニミズムやアニミズム心性は老年的超越と同様に、以前よりもさらに強化されるだろう。お礼参りやモノ供養、巡礼などの宗教的行為が高齢者に多いのもそのためであろう。

以上のように、老年的超越、アニミズム心性、自我の3つの概念は相互に深い関係性を示し、母性原理が優位な社会では、いずれの発達段階にも同時並行的に老年的超越は顕在するが、父性原理の優位な、すなわち自我や自我意識が重視される社会では、Tornstam (1989)<sup>7)</sup>が指摘するように老年期後半になって、父性原理の影響が弱まって(自我意識が低下して)初めて、老年的超越の感覚が生じると思われる。その場合、同時にアニミズム心性も高まると考えられる。

今後これらの仮説を実証的に検証することが求められる。特に文化的要因が関与する研究においては、比較研究のための研究パラダイムが必要であり、多くの条件や変数をいかに統制するかが重要な研究上の課題になるだろう。

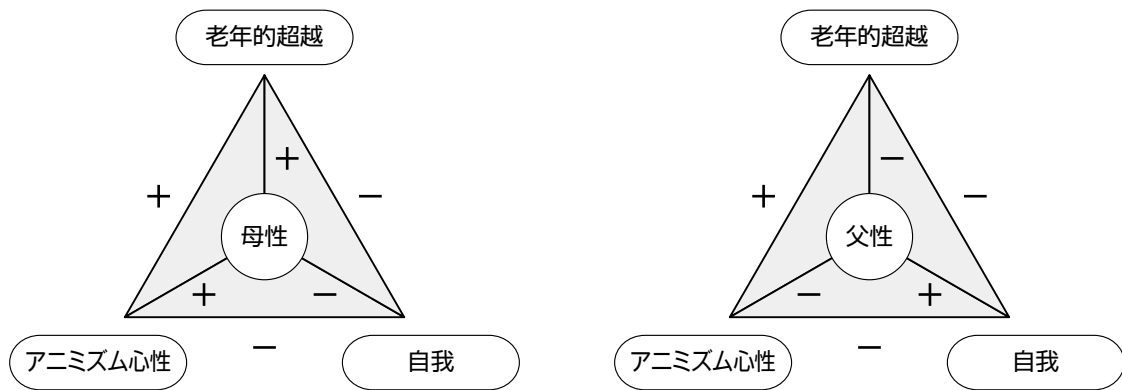


図2 老年的超越、アニミズム心性、自我の3者の関係の仮説モデル  
(+は正の相関を、-は負の相関を示す)

## 5 結論：我が国の超高齢者に老年的超越の概念はそのまま適用できるか

図2の仮説モデルによれば、父性原理の下では個としての認識が高まり、自我が強化され、その結果老年的超越やアニミズム心性は抑制される。従って老年的超越が生じるのは自我が再び弱くなる老年期後半となり、Tornstamの指摘が当てはまる。しかしながら母性原理の下では、自我が強化されずにアニミズム心性や老年的超越は発達の高さにわたって存在し、老年期以降も加齢と共に強化されていくと思われる。結論としては、父性社会ではTornstamの指摘は当てはまるものの、母性社会では老年的超越は老年期後半になって初めて出現する心性ではなく、強弱は別としてどの発達段階にも認められる心性であろう。

### まとめ

本稿ではTornstamの提唱した老年的超越の概念をめぐる、アニミズムや山岳信仰、自然崇拜の色彩を歴史的に多く残している我が国において、この概念がそのまま老年期後半にも適用できるのかどうかについて論じた。我が国におけるアニミズム研究は民俗学や文化人類学、宗教学、文学、美術研究など、多くの分野で取り上げられてきたが、心理学分野では単発的な研究は散見される程度で、体系的、実証的な視点からの研究は極めて少なかった。その中でアニミズムを発達の観点から体系的に論じた河村(1994)<sup>23)</sup>の発達研究は特筆されるだろう。

国立国会図書館所蔵の文献検索(NDL ONLINE)を行った結果、アニミズムで検索するとヒット数はそれぞれ545件(～2018年)、239件(2000年～)、そのうち心理学関係は69件(2000年～)であった。一方学術図書に限定した学術情報データベースCINIIで検索する

と、アニミズムの心理学研究のヒット数はそれぞれ19件(1950年～)、11件(2000年～)であった。しかしながら本稿で紹介したアニミズム的思考やアニミズム心性に関しては4～5件にとどまっていることがわかった。今後はこの未開拓な研究領域の中から、我が国の文化や日本人の行動様式の理解につながる知見が得られることを期待したい。

アニミズムやアニミズム心性が児童期以降も受け入れられやすい我が国に対し、欧米の文化の下では自我の確立が、成人・完成した人間の証しという暗黙の了解があるのではないだろうか。そのために我が国ではアニミズム心性や老年的超越といった感覚は、どの発達段階でもごく当たり前にみられる感覚であるとの認識が強いが、欧米ではこの感覚が自我意識の衰える老年期後半になって出現するのではないだろうか。近年心理学に限らず福祉や精神医学の分野でもスピリチュアリティ(ここでは霊性と訳しておく)の重要性が、むしろ欧米の研究者の間から指摘されている。ポジティブ心理学が示すように、Well-beingという人類共通の価値は、自我が十全に機能していることを前提にしているとは必ずしも言えないのではないだろうか。これまで多くの研究者が指摘してきたように、欧米の理論や研究結果を我が国に適用する際には、文化的・歴史的背景を考慮したうえで解釈しなければならない。図らずも著者らのアニミズム研究を通して、老年的超越の概念を検討することによって、研究を進めていくうえで文化・歴史的背景を十分に考慮することの大切さを改めて知った。

今後の課題として、老年的超越の概念に関する実証的研究の推進と、アニミズムやアニミズム心性に関する国際比較をどのようにして進めていくか、また近年注目されているspiritualityの概念(必ずしも宗教と関

連するとは言えない)と老年的超越やアニミズム心性との関連についての議論が必要になってくる。いずれにせよ心理学はもちろん、近代科学の進歩は父性原理に拠るところが大きい、今日世界平和や幸福、平等、グローバルスタンダード、などが強調されている中で、自我や自我意識と並行して、well-beingの視点からも人間の成長や発達、価値観などを考えていくことが必要になってくるだろう。

## 引用文献

- 1) 末田啓二他 2008 高齢者の「教える」行為が自らの心理的適応と社会的態度・行動に及ぼす効果 平成18年度科学研究費補助金研究成果報告書 萌芽研究17653083
- 2) Seligman, M.E.P. 1998 Building human strength: Psychology's forgotten mission. APA Monitor, 29, January, 2.
- 3) 末田啓二他 2015 Positive focus面接が要介護高齢者のwell-beingに及ぼす影響 平成24年度科学研究費補助金研究成果報告書 挑戦の萌芽研究 24653205
- 4) 橋本京子・子安増生 2011 楽観性とポジティブ志向および主観的幸福感の関連について パーソナリティ研究, 19, 233-244.
- 5) 橋本京子・子安増生 2012 楽観性とポジティブ志向が幸福感に及ぼす影響 楠見孝・藤田和生編 2012 心理学評論, 55 (1), 178-190.
- 6) Kennedy, Q., Mather, M. & Carstensen, L. 2004 The Role of Motivation in the Age-Related Positivity Effect in Autobiographical Memory. American Psychological Society, 15, 208-214.
- 7) Tornstam, L. 1989 Gero-transcendence; A meta-theoretical reformulation of the disengagement theory. Aging: Clinical and Experimental Research, 1, 55-63.
- 8) 末田啓二 2000 高齢者に於ける自尊感情の因子構造—青年との比較— 近畿大学教職教育部教育論叢, 12, 1-10.
- 9) Piaget, J. 1929 The child's conception of the world. London:Routledge & Kegan Paul. (大伴茂(訳) 1955 児童の世界観(ピアジェ臨床児童心理学Ⅱ) 同文書院)
- 10) Looft, W.R. & Bartz, W.H. 1969 Animism revived. Psychological Bulletin, 171, 1-19.
- 11) Carey, S. 1985 Conceptual Change in Childhood. MA: The MIT Press. (子どもは小さな科学者か—J. ピアジェ理論の再考— 小島康次・小林好和訳1994 ミネルヴァ書房)
- 12) Lourenco, O., & Machado, A. 1996 In defense of Piaget's theory: A reply to 10 common criticisms. Psychological Review, 103, 143-164.
- 13) 永盛善博 2009 Piajetのアニミズムに対する批判の検討 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊17-1, 113-122.
- 14) 大元誠 1988 「感」的認識としてみたアニミズムに関する発達的研究 佐賀大学教育学部研究論文集, 35 (2), 59-69.
- 15) 池内裕美 2010 成人のアニミズム的思考: 自発的喪失としてのモノ供養の心理 社会心理学研究, 25 (3), 167-177.
- 16) 末田啓二・藤田裕一 2015 我が国におけるアニミズム心性に関する心理学的研究の現状と今後—高齢者研究から見えてくるもの— 神戸親和女子大学研究論叢, 11, 9-14.
- 17) 藤田裕一 末田啓二 2013 アニミズム心性は世代間で異なるか? 日本発達心理学会24回大会(東京)
- 18) マズロー.A.H. 1973 人間性の最高価値 上田吉一訳 誠信書房 (Maslow, A.H. 1971 The Farther Reaches of Human Nature.)
- 19) Erikson, E.H. & Erikson, J.M. 1997 The Life Cycle Completed Expanded edition. WW Norton & Company, New York.
- 20) 河合隼雄 1976 母性社会日本の病理 中央公論社
- 21) 尾崎真奈美 2010 ポジティブ心理学とスピリチュアリティ 堀毛一也編 ポジティブ心理学の展開 現代のエスプリ512号 188-198.
- 22) 増井幸恵、権藤恭之、河合千恵子、呉田陽一、高山緑、中川威、高橋龍太郎、關牟田洋美 2010 心理的well-beingが高い虚弱超高齢者における老年的超越の特徴—新しく開発した日本版老年的超越質問紙を用いて— 老年社会科学, 32, 33-47.
- 23) 川村久美子 1994 概念的知識の発達に関する研究 東京都立大学博士論文(心理学)